

エディブル・ランドスケープが 育む人とみどりがつながる まちの風景



千葉大学予防医学
センター特任助教・
EDIBLE WAY代表・
一般社団法人生活と
園藝舎代表理事

江口亜維子

エディブル・ランドスケープ（食べられる景観）とは

「エディブル・ランドスケープ（Edible landscape：食べられる景観）」とは、果樹や野菜、ハーブなど食べられる植物で構成する造園手法です。もともとは家庭菜園や前庭づくりから発展し、食卓に美味しく健康的な食べ物をもたらす、環境負荷を減らしながら、美しく計画するという考え方です（Creasy, 1982）。近年は欧米を中心に、都市の公共空間でも導入が広がっています。たとえば英国・トッドモデンでは、街中の多様な場所に食べられる植物を植え、「If you eat, you are in!（食べるなら、あなたは参加者!）」の合言葉で地域の人々を巻き込み、コミュニティで管理しています。地域環境やコミュニティ再生に資する取り組みとして世界に広がっています（Warhurst et al., 2014）。

また、海外のランドスケープ分野のシステマティック（系統的）・レビュー論文では、持続可能な都市開発において、エディブル・ランドスケープが、環境を美しくするだけでなく、都市の生態系改善やコミュニティ形成、健康、教育など多面的な効果をもたらし得ることが示されています（Zheng, et al, 2023）。日本でも、果樹の街路樹が一部で見られ、特に最近では、屋上・空き地・公園の一角などを活用する都市型農園の事例が増えてきました（新保, 2022）。一方、エディブル・ランドスケープの普及には、維持管理、市民の理解・技術の不足などが課題とされ（Zheng, et al, 2023）、特に日本では「公共空間の私物化」という観点から、公共空間への展開には制度・運用面の障壁が指摘されてきました（木下他, 1999）。

EDIBLE WAY：軒先からはじめるエディブル・ランドスケープづくり

日本でも、どうやったらエディブル・ランドスケープづくりが実現可能かと考え、2016年に所属していた千葉大学大学院園芸学研究科（当時）のプロジェクトとして開始したのが「EDIBLE WAY（エディブルウェイ）」です。千葉大学松戸キャンパス周辺の住宅地沿道で、ロゴ入りの可搬式フェルトプランターを住民や店舗前の私有地側に設置し、参加者が野菜・ハーブ・花を育てます。日本に古くからある地先（路地）園芸の文化を活かし、同一仕様のプランターが連なる可視性によって、沿道にエディブル・ランドスケープを展開しています。「Edible＝食べられる」「Way＝道／方法」の二重の意味を持つ造語です。基本は個人の園芸活動で、収穫は所有者に委ねますが、収穫期には少しずつ持ち寄って調理し、いっしょに味わう共食の機会も設けてきました。

立ち上げ当初は、大学院生が一軒ずつ訪問して説明し、まず7軒で栽培が始動しました。お揃いのプランターが沿道に並んだことが話題となり、通りでの声かけや口コミから約2か月で22か所へ拡大しました。住宅に加え、パン店や小規模保育所も参加し、2025年時点では約60か所・100基超のプランターへと広がっています。



沿道に並ぶプランター



野菜、ハーブ、花の寄せ植え



タネ・苗交換会の様子

栽培は概ね4～9月を夏野菜、10～3月を冬野菜の時期とし、野菜・花・ハーブの寄せ植えで、収穫までの期間も彩りや香りを楽しめる用と美を兼ね備えたエディブル・ランドスケープならではの栽培をしています。植え替え期には講座とタネ・苗の交換会を実施し、家庭で余ったタネや、育ちすぎたハーブ株を持ち寄り、育て方・食べ方・エピソードも共有することで、園芸を介した交流が自然に生まれています。

エディブル・ランドスケープを通じた沿道のコミュニケーション

参加者へのインタビューでは、沿道で近所の人はもちろん見知らぬ通行人とも挨拶や立ち話の機会が増え、既存のつながりを土台に関係が深まる「地域コミュニティの向上」、さらに「景観の質向上」や「環境教育」へも貢献する可能性が示されました（江口他, 2020）。普段は食卓やスーパーで見る野菜が、花を咲かせて実る過程は、子どもだけでなく大人にとっても発見が多く、会話の種になります。ブロッコリーに見入っていた子どもに声をかけて収穫させてあげ、その後「ブロッコリーのおばちゃん」と声を掛け合う関係が生まれ



植物を介して会話が生まれる

たという微笑ましい例もあります。園庭のない保育所では、毎朝の水やり体験や収穫の給食利用に加え、野菜の断面を使ったスタンプでのクラフトづくり、青虫の観察など、多様な食育・自然観察に活用されていました。高齢の参加者には、プランターの手入れ具合がその人が元気であるかの見守りの役割を果たしているという事例もありました。

コロナ禍からはじめたクラフトづくり

2020年のコロナ禍では、共食活動を休止し、代わりにクラフト活動を取り入れ、剪定枝を活用したクラフトサインを作り、各世帯のプランターに設置しました。コロナ禍での活動について参加者20名へのインタビュー調査では、学校行事や地域のイベントは減少したものの、水やりの際の立ち話など日常的な近所付き合いは8割で大きな変化はなく、概ね維持されていました。特に、クラフトサイン設置後は、他のプランターを意識して見る機会が増え、外出時の間接的なコミュニケーションや対面時の会話のきっかけとなっていました。中にはクラフトサインを見に子どもと散歩をするよう



プランターに設置したクラフトサイン

になった方もいました。

以降、ハーブや草花をつかったワークショップを定期的に開催しています。対象年齢を限定せず募集することで、クラフトに関心を持つ親子や高齢者が参加し、植物を介したコミュニケーションが生まれる植物を介した“ゆるやかな学び合い・多世代交流”の場にもなっています。

歩道の大型プランターへ：みんなの“まちのプランター”

2024年度からは、松戸市みどりと花の課と協働事業を開始し、歩道の大型プランター11基を「まちのプランター」として活動を開始しました。活動開始にあたり、エディブルウェイ、松戸市、地域包括支援センター、町会、子ども会など地域で活動する方々と「まちのプランター作戦会議」を開き、活動内容や管理方法について話し合いました。水やりは当番制ではなく、通勤・通学や散歩のついでに2Lペットボトル程度で各自が水やりをしています。プランターに設置している水やり表とLINEオープンチャットを使って情報共有をしています。収穫は「管理に参加している人が収穫できる」というルールで、虫の発生は観察の機会に、無断収穫は声をかけて参加を促すきっかけにするなど、「寛容さ」を大切にする方針で活動しています。

月1回お手入れ会を開き、植物の管理と、その時に使える植物で、ハーブペーストづくりや芳香浴などミニワークショップをして、植物をみんなで楽しむ機会を設けています。未就学児から90代まで多世代が参加し、ここでも植物を介した多世代の交流やつながりが育まれています。



まちのプランターお世話会



クラフトワークショップ

人とひと、人とみどりをつなぐエディブル・ランドスケープ

エディブル・ランドスケープは、植物を育て景観を整備するだけではなく、成長や収穫の喜び、収穫物の分かち合いなどを通じて、あらゆる世代が関心を持ち、気軽に参加できる可能性を持ちます。

沿道や歩道といった生活に身近な場所で展開されるエディブル・ランドスケープは、「景観を楽しむ」「共に世話をする」「場を共にする」「収穫を分かち合う」といった活動を通じて、地域に学び合いや交流の機会を提供します。そのプロセスと活動の積み重ねが、人と人、人とみどりをつなぎ、安心して暮らせる地域を育む景観づくりとなるのではないかと考えています。

【引用文献】

Rosalind Creasy: “The Complete book of Edible Landscaping”, Sierra Club Books, San Francisco, 1982

WARHURST, P., et al: INCREDIBLE! PLANT VEG, GROW A REVOLUTION, TROUBADOR PUBLISHING LTD, 2014

Zhi-Wei Zheng, Rung-Jiun Chou: The impact and future of edible landscapes on sustainable urban development: A systematic review of the literature, Urban Forestry & Urban Greening, Volume 84, 2023

新保奈穂美:『まちを変える都市型農園: コミュニティを育む空き地活用』, 学芸出版社, 2022

木下 勇, 吉川 仁: 都市におけるエディブル・ランドスケープ（食べられる景観）の意味と役割について, 都市計画論文集 34 巻, pp.361-366, 1999.10

江口 亜維子, マリア・エルミロヴァ, 阿部 健一, 木下 勇: 住民参加型の住宅地沿道におけるエディブル・ランドスケープ（食べられる景観）に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 85 巻, 776 号, p. 2183-2192, 2020